

Maral ANDASSOVA

Emperor Jinmu in the *Kojiki*

『古事記』の中の神武天皇

明治維新の結果、神道は国家の儀式体系として確立され、天皇の統治は絶対神聖であると強調された。皇統の権威は天照大神に始まる神の世界と結びつけられ、『古事記』と『日本書紀』の中の初代天皇、神武天皇に関心が向かった。

神武天皇は、地上を統<sup>す</sup>べるために高天原から降臨した天照大神の孫、ホノニギノミコト（火瓊瓊杵尊）から数えて三代目の子孫で、日向<sup>ひゅうが</sup>から東征して統治に最も相応<sup>ふさわ</sup>しい地、大和<sup>やまと</sup>に到った。歴史学では、神武天皇は神話的存在であり、実在しないとされている。歴史家は神話の持つ意味を論ずるのではなく、『古事記』と『日本書紀』を古典歴史の研究史料として扱っている。いっぽう西郷信綱は、『古事記』の神話には構造的普遍性があると捉え、したがって皇室の統治は普遍的であるとしている。西郷によれば、神武天皇に征服された大和は聖性の中心地であり、熊野、出雲、熊襲などの遠隔地は征服されたがゆえに、天皇支配の下に置かれた周辺の土地である。

しかし、神武天皇のシャーマン経験という観点からは、大和が聖性の中心地であるとすることはできない。神武天皇は自ら大和を征服するのではなく、シャーマンとして大和に対峙している。本稿はシャーマニズムの観点から『古事記』における神武天皇の神話を捉えなおす。

【『古事記』、大和、神武、シャーマニズム、神道、大物主、野蛮人、さゐ（狭井／佐章）川】

Gustav HELDT

Liquid Landscapes: *Tosa Nikki's* Pioneering Poetic Contribution to Travelogue Prose

流体の風景——トラベログの散文体への『土佐日記』の貢献

本稿は平安期の旅行記に『土佐日記』がもたらした革新的な貢献を明らかにするものである。すなわち、虚実を巧みに取り混ぜた詩的な構造を用い、語りを区切る訪問地ごとの散文描写の中の空間・時間・情動を切り取る手法である。都を遠く離れた地で、流体の風景に<sup>は</sup>嵌めこまれた日記は独特の言説空間を現出させ、いかに平凡な文章も絶大な効果を発揮するようになる。日記の持つこうした側面は、新しい紀行文体として、永続的な意味を付加してくれる。文章やジェンダーとの関わりにこだわる現代の英語圏の文献が見逃しがちなあり方である。

【『土佐日記』、紀貫之、紀行文学、和歌、アンソロジー、物語化、地名、太平洋、日記、絵画ナラティブ】

Quitman Eugene PHILLIPS

Kano Motonobu's *Shuten Dōji Emaki* and Anti-demon Rituals in Late Medieval Japan

狩野元信『酒伝童子絵巻』と中世後期日本の鬼祓い

サントリー美術館の『酒伝童子絵巻』は狩野元信（1477-1559）とその一門が公家の書家たちとともに、16世紀初頭に制作した。鬼神の首魁<sup>しゅがい</sup>、酒伝童子とその一味を武士の一団が征伐する物語を文章と挿絵で描いたサントリー美術館所蔵の絵巻は、極めて影響力の大きい作品である。これまでの研究で、この話の成立には鬼祓いの儀式が影響していることがわかっている。本稿はこれらの先行研究を起点として重要な知見を活かしていくが、対象をサントリー所蔵作品一点のみに絞り、とくに絵および全体の構成に見られる、この版に特有の強調点とニュアンスについて理解を深めることを目標とする。

この絵巻の制作と受容における鬼祓い儀式の重要性を論じるわけだが、とくに物語に登場する主要人物のイメージに、山伏や巫女、陰陽師など鬼祓い儀式の遂行者や、さらには式神や護法童子などの超自然的守護者の姿がいかにかねねられているかを示す。これらの類似は非常に顕著であるので、ある程度意図的に取り入れられたのだと思われるが、もっと広い論点からすれば、制作側も消費側も、毎年のように数多くの鬼祓いの儀式を目にし、参加していたのであり、当然ながら、これらの存在は彼らの文化的想像世界の重要な位置を占めていたのである。

【狩野元信、酒伝童子、源頼光、安倍清明、絵巻、鬼、山伏、巫女、式神、護法童子】

Gouranga Charan PRADHAN

Natsume Sōseki's English Translation of *Hōjōki*: Characteristics and Strategies

夏目漱石の英訳『方丈記』——その特質と戦略

本稿は著名な小説家、夏目漱石（1867–1916）の英訳『方丈記』（1212）について論じる。若き漱石の先駆的翻訳は、ほんらい仏教思想、災害の描写、<sup>いんとん</sup>隠遁をテーマとする洞察的エッセイの古典という位置づけから外れるものだった。訳者の興味は、『方丈記』を、自然を描いたヴィクトリア朝ロマン主義的文学として読むことに向かっており、最終的に鴨長明（1153/1155–1216）を英国の詩人ウィリアム・ワーズワース（1770–1850）になぞらえている。漱石の師であった英文学教授のジェイムズ・メイン・ディクソン（1856–1933）は、漱石がこの小説を練り上げ、先鋭的な解釈を加えるのに大きな役割をはたしたが、翻訳および解説からなるこの作品は、翻訳という営為そのものについてもユニークな見解を示している。すなわち、翻訳は文化流通の輪の重要な構成要素でありながらも、異なる文化や言語間の移転メカニズムとしての働きは心もとない。こうした点を明らかにするほか、この作品に対する批判的分析としての本稿はまた、後の漱石の小説作品に登場する翻訳についての重要な視座が、実は彼の大学時代にいかに形成されたかについても示したい。

【漱石と翻訳、日本語文学の流通、『方丈記』の受容、鴨長明、中世日本文学】

Sharif MEBED

A Critique of Desire: Law, Language, and the Death Drive in Kawabata's *House of the Sleeping Beauties*

## 欲望についての一考察——川端康成『眠れる美女』に見る法と言語、死への衝動

本研究は川端康成の短編小説『眠れる美女』について、この作品および文芸一般における法の役割と機能、およびそれと欲望の関係に焦点を絞って分析する。この問題と取り組むために筆者はフランスの精神分析家ジャック・ラカン（1901–1981）の理論にヒントを求めた。一見したところ、川端作品とフランスの理論や思索言説には何の関係もないように思える。川端は芸者、日本舞踊家、因習的家族の風景などのイメージを使った日本の美学の繊細な描写で知られており、デリダやクリステヴァ、バルト、ラカンらを生んだ学生運動、政治背景、前衛雑誌『テル・ケル』運動などとは無縁のように思える。だが本論は、川端とラカンにはジグムント・フロイト（1856–1939）への敬意、そして言語への批判的見方という共通点があることを明らかにする。さらに、川端は『水晶幻想』（1931）などの前衛作品のほか、『狂った一頁』（1926）、『みづうみ』（1955）、『片腕』（1965）、『眠れる美女』（1960）などの映画脚本を書いている。これらの作品は、無意識や被験者たる人間の性質についての拡張瞑想とも言えるもので、そのうち『眠れる美女』を本稿で取り上げたのは、人間の欲望の本質およびその言語、法、不道德、タブーとの関係が浮き彫りにされているからである。これらは日本文学研究と精神分析いずれにとっても興味を中心となる概念である。

【ジャック・ラカン、戦後日本文学、精神分析、父の名、小文字の他者、「母語の祈り」】

NISHINO Ryōta

Better Late than Never? Mizuki Shigeru's Trans-War Reflections on Journeys to New Britain Island

遅れてもやらないよりまし？

—ニューブリテン島への旅をめぐる水木しげるの戦争横断思索行

著名な漫画家、水木しげる（1922–2015）はかつて自身が死線を 彷徨<sup>さまよ</sup>った戦地ニューブリテン島やパプアニューギニアを何度も訪れた。その旅行記や戦争体験の回想録は、水木の意識に通底する要素、変化した要素の双方について理解を深めることを可能とする歴史文学である。本稿は、感嘆、幻滅、決意、終結（closure）という水木の姿勢の変化を追うことによって、彼が繰り返し描写した旅を検討する試みである。水木は村人ののんびりしたライフスタイルを戦後日本の順法的労働倫理へのアンチテーゼととらえる一方で、訪問のたびにニューブリテン島の牧歌的資質が減衰していくことに懸念を深める。1989年の昭和天皇崩御と水木の村の親友トペトロの死は、数年後、水木を戦争の記憶と村人への自分の接し方についての自己反省に駆り立てることになる。村人が過去と現在に対して抱く不満への理解が深まり、彼らとの関係を評価しなおすことになった。水木は自分の負った倫理的負債を支払う姿勢と決別するつもりだったが、自分の旅がトペトロや村人にとって何を意味するのか自問することはなかった。本稿では、こうした関係に対する水木の心理変化への考察が元日本人兵士の戦地再訪旅行記のサブジャンルになりうることを示したい。こうした旅行記は戦時から戦後にわたる日本とパプアニューギニアの関係の、広い意味での権力力学を反映するものと捉えることができよう。

【太平洋戦争、旅行記、対人関係、マンガ、南洋オリエンタリズム、ノスタルジア、パプアニューギニア】

Justin AUKEMA

Cultures of (Dis)remembrance and the Effects of Discourse at the Hiyoshidai Tunnels

記憶（忘却）の文化と日吉台地下壕をめぐる言論の影響

本稿では慶応義塾大学日吉キャンパスを例に、第二次世界大戦の物理的<sup>ざんし</sup> 残滓をめぐり初期戦後史を論じる。戦時中、帝国海軍連合艦隊はこの地を参謀本部とし、巨大な地下壕を築いた。戦後 1949 年まで、キャンパスはアメリカ陸軍第八軍に接收されていた。だがこの歴史は 1980 年代後期までほぼ全く忘れ去られていた。本稿は、その理由がこの地と慶応の戦後史に求められることを明らかにする。具体的に言うと、戦後初期の慶応知識人は慶応義塾大学を日本のリベラル民主主義の歴史的先駆者として描こうとした。しかしこの歴史書き換えにおいて、リベラルが戦時中軍国主義に協力した事例は不都合な真実となり、キャンパスに残った物理的戦時遺構はその過去を可視化するがゆえに、望まれぬ時代錯誤の遺物となったのである。本稿は日吉台地下壕のような軍事遺構の忘却が、戦後日本におけるリベラル民主主義勢力創出の、ある意味で副産物であると論じる。

【戦地、第二次世界大戦、慶応義塾大学、日吉キャンパス、福沢諭吉、小泉信三、リベラリズム、GHQ、戦後、忘却】

Bert WINTHER-TAMAKI

Earth Flavor (*Tsuchi aji*) in Postwar Japanese Ceramics

戦後日本の陶芸における「土味」

本稿は 1950 年代から 1970 年代初期にかけて、日本の陶芸が土の美学に転換したことを検討する。その美学の呼称を「土味」というが、ここでは「長時間、火を入れて得られる土のむき出しの肌感の美」と定義する。これは戦後期の現代陶芸家が日本の古陶のある種のタイプを「土と窯が一体となった自然の風合」として称え、新たに復活させたものである。戦後の「土味」陶芸の中心は、古来、焼物の生産地だった瀬戸と信楽、日本の「土味」と連動したアメリカの陶芸家、そして前衛陶芸グループ「走泥社」の四点に集約される。

愛知県瀬戸の窯は茶器と結びついた正統的「土味」の源泉であったが、その命運は保守派陶芸家の加藤唐九郎をめぐる一連の論争に翻弄された。中世の信楽の鉢は写真家土門拳の作品によって「土味」のアイコンとなり、現代陶芸家の実践のなかで再評価された。アメリカは、陶芸作品にとっても日本の「土味」という考え方にとっても重要な市場だったが、日本を新しい視点へと駆り立てる挑発の発信源ともなった。最後に「走泥社」グループによる「土味」の実験的陶芸彫刻の幅は広く、大地の生きた生命体を思わせる八木一夫の作品から、大地を汚す産業汚染に抗議する里中英人の焼成などが知られる。

【土門拳、加藤唐九郎、奈良原一高、イサム・ノグチ、里中英人、瀬戸、信楽、走泥社、ピーター・ヴォーコス、八木一夫】